



C型慢性肝炎の 新薬について

内科診療部長 なみ かわ まさ し 苅川 昌司

C型慢性肝炎とは、C型肝炎ウイルス（HCV）が肝臓に持続感染し、炎症を起こす病気です。肝臓の炎症が長期間続くと、肝硬変や肝臓がんに進行し、生命を脅かすようになります。しかし初期には自覚症状を感じないことがほとんどで、いまだに医療機関を受診していないHCV感染者は全国で100万人にも上るといわれています。

C型慢性肝炎の治療の目標は、HCVを体内から排除することで、従来の治療の中心は「インターフェロン（IFN）」という注射薬でした。IFNの改良が重ねられ、治療効果は年々向上してきましたが、注射のために最低でも週1回の受診が必要で、発熱やうつ症状など多種多様の副作用が高頻度で出現するため、治療に際して大きな精神的・身体的負担がかかることが課題となっていました。皆さんの周りでも、IFNの副作用が心配でC型肝炎治療を断念した方がいらっしゃるかもしれません。

そんな方々に朗報といえるのが、2014年以降、続々と認可されているC型肝炎に対する飲み薬だけの治療です。どの薬も治療効果が高く、副作用が少ないため、これまで治療がためらわれたご高齢の患者さんや肝硬変の患者さん、うつや腎不全などの合併症を抱える患者さんなどでも治療が可能となるケースが増えています（ただし、ある程度進行した肝硬変などの場合は、治療ができないことがあります）。「21世紀の国民病」とまでいわれていたC型肝炎の撲滅が、現実のものになりつつあるともいえます。

当院でも、これまで50人以上の患者さんに飲み薬でのC型肝炎治療を行いました。治療のための入院が必要なく、副作用を感じる事が少ない（ほとんどない）ということで、ご好評をいただいています。高額な薬（ある薬は1錠8万円！）ではありますが、医療費の助成制度を利用すると、月1～2万円の自己負担で治療を受けられます。

当院内科肝臓グループは、C型肝炎の撲滅を目指し、近隣の先生方と連携しながら、今後も日々研鑽に努めてまいります。ご自身や身近な方で思い当たる点があれば、かかりつけの先生や当院内科にご相談ください。

このような方は、いちどC型肝炎の検査を受けることをお勧めします。

- 過去の健康診断で肝機能の異常を指摘されたことがある
- 1992（平成4）年以前に輸血を受けたことがある
- 大きな手術を受けたことがある
- 出産時に大量出血があった
- 使い回しの針で注射されたことがある
- 長期間血液透析を受けている
- 血液製剤を投与されたことがある
- ピアスやタトゥー（刺青）をしている

check!

